集英社版 世界の文学 10 ゴンブローヴィッチ

フェルディドゥルケ　米川和夫＝訳

シュルツ

肉桂色の店　クレプシドラ・サナトリウム

工藤幸雄＝訳

集英社

©1977 Shueisha

集英社版世界の文学10
ゴンブローヴィッチ／シュルツ
一九七七年六月二〇日印刷
一九七七年七月二〇日発行
訳　者　米川和夫／工藤幸雄
編　集　株式会社綜合社
一〇一　東京都千代田区神田神保町三―六―五
電話（〇三）二三九―三八一一
発行者　堀内末男
発行所　株式会社集英社
一〇一　東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
電話　出版部（〇三）二三〇―六三六一
販売部（〇三）二三〇―六一七一
印刷所　中央精版印刷株式会社
大日本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします
定価は帯に表示されています

0397-122010-3041

目次

ゴンブローヴィッチ　米川和夫訳　3

フェルディドゥルケ

シュルツ

肉桂色の店　工藤幸雄訳　283

八月　285

訪問　293

鳥　299

マネキン人形　303

マネキン人形論　309

マネキン人形論（続）　313

マネキン人形論（完）　315

ネムロド　319

牧羊神　323

カロル叔父さん　326

肉桂色の店 329
大鰐通り 338
あぶら虫 346
疾風 350
大いなる季節の一夜 355
クレプシドラ・サナトリウム 365
七月の夜 367
父の消防入り 372
第二の秋 378
死んだ季節 382
クレプシドラ・サナトリウム 395
父の最後の逃亡 415
解説 米川和夫／工藤幸雄 421
著作年表 442

工藤幸雄訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

フェルディドゥルケ

1　誘拐

火曜日、夜はもうまったくのところ終わってしまったのに、すっかり明けきるにはまだ間があるという、例のまるで人けのないぼんやりした時刻に、目をさました。不意に目がさめると、すぐに停車場までタクシーをとばそうと考えた。なにしろ、旅にでるのだという気がしたからだ。――一分ほどしてから、やっと、おれのためには、停車場に汽車はとまっておらず、どんな時も告げられはしなかったのだと、じつになさけない気持で思い知った。濁った明かりのうちに横たわったまま、おれの体は、がまんのならぬほど恐れおののき、その恐怖のせいでおれの心をおしつけ、心は心でまた体をおしつけ、そのため、もっともこまかな筋という筋までが期待にふるえて痙攣した。なにも起こりはしない。なにも変わりはしない。けっしてなにもやって来はしない。なにを企てたところで、なにも、なんにも始まりはしない。これは不在の恐れ、存在しないという恐怖、生きていないことの不安、現実でないことの危惧、内部の分裂、拡散、消失にたいするおれの全細胞の生物的な叫びだった。けちくさい零細卑小さのおじけたあまり声にでる呻き、解体のパニック、一部分を背景にした恐慌、自分のうちにひそんだ暴力と外からおびやかしてくる暴力とをまえにした恐怖――だが、それよりもなによりもいちばん重要なことは、内部の部分部分のあいだでとりかわされる揶揄嘲弄、つまり、おれの体の放埒無拘束な部分部分と、また、おれの心のそれに照応するアナロジックな部分部分の内面的な嘲りあいからくる一種特別な感じ、そうとでも呼ぶよりは仕方のないようななにかが、いつもいつも一歩も離れず、おれにつきまとって来ていたことだ。

夜のあいだおれを追いまわし、やがて、おれの目をさませた夢は、この恐怖の現われだった。自然の法則では禁じられているはずの時の逆行によって、おれは十五、六のころとなにからなにまでそっくりの自分を見たわけだった。少年時代にかえったのだ――川のほとり、水車小屋のすぐわきの石の上に、風にふかれて立ちながら、おれはなにかしらつぶやいていた。にわとりのようにかん高くて黄色い、とっくに葬られてしまったはずの自分の声をおれは耳にした。そして、輪郭のまだすっかりかたまっていない顔にあやふやな伸びようをみせている鼻と、大きすぎる手を目にした。つまり、この中途半端な過渡期の発育段階につきもののいやらしいねばねばしさをおれは感じたのだ。おかしさと恐ろしさにおれは目をさました。いまあるような三十男のこのおれが、昔あったようなくちばしの黄色い青二才

のおれを嘲弄すれば、むこうはむこうでまた同等の権利に立って今のこのおれを嘲笑し――早い話が、けっきょく、おれたちはどちらもこうして揶揄され、嘲弄されているのだという気がしたからだ。どういう道を辿りたどってわれわれが現在の所有の状態にまで達したか、それを知れというのがあの不仕合わせな記憶だ！　しかし、そのあと、もう目をさましてはいたものの、まだなかば夢心地で、おれはこんなことを感じていた。おれの体には統一がない。部分的にはそこここがどうもまだ子供のものだ。おれの頭はおれのふくらはぎを嘲弄揶揄し、ふくらはぎはふくらはぎで頭を笑う。指は心臓を、心臓は脳をあからさまにからかい、鼻は鼻で目を、目は目で鼻を大声に笑って、腹をかかえる――こうして、すべての部分が、手当りしだいになんでも槍玉にあげてゆく激しい総体的な嘲弄の雰囲気のうちで、いとも野蛮に暴力をふるいあっているのだ。そのうちに、おれは、はっきりした意識を完全にとり戻すと、やがて、自分の生涯についてゆっくり考えをめぐらし始めた。だが、恐怖はやはりこれっぱかりも減りはしない。それどころか、ますます力を増してきた――といっても、ときどき笑いがこみあげてきて、とめようにも口がいうことをきかず、恐怖を中断しはしたが（いや、それもじつはただ強めただけのことかもしれない）……まったく、おれは人生の道のなかばに、暗い森のただなかへと踏み入ったのだ。その森は、また悪いことに、緑だった。

なぜなら、うつつの境でも、おれは、夢のうちと同様、やっぱり固定してはおらず、分裂していたからなのだ。ちょっと前、おれは三十という避けようもないルビコンの川を越え、里程のしるべ石を一つあとにした。戸籍やうわべからは、おれも成熟した大人に見えてはいたものの、しかし、実際はそうではなかった――では、いったい、おれは何者だったか？　三十づらさげたブリッジの囲み手？　つまらぬ生活の用をたし、期日などというものも持つことのある、その場かぎり、行き当たりばったりの仕事師？　本当におれの置かれている状況というのはなんだったろう？　このおれは喫茶店やバーなどを歩きまわり、人と会っては言葉をかわし、ときには思想までも交換しあってはいるけれども、その状況はというと、それがどうも一向にはっきりしなかった。自分でも一人前の大人か、青二才か分からないでいるしまつだったのだ。こうして人生のなかばに達したというのに、おれはまだあれでもなければ、これでもなく――つまるところは、けっきょく、何者でもなかったわけだ。同年輩の連中はもうだれもが結婚して、人生観とまではいかぬまでも、種々さまざまな役所などにしかるべき職などを持つようになってきていたが、そういった手合いのおれを見る目には、もうありありと不信のいろが現われるようになっていた。おれのおばさんれん――うざうざいるので、おまけに付けられ、つぎはぎにまで当てられにくる半おふくろといったかたがただが、心からもうひとの

ことを愛していて、前まえからなんとかおれを説き伏せたうえ、なんにせよれっきとした職、というのは、つまり、弁護士とか会社員とかいうものにおれをして、身をかためさせようと、顔を合わせれば、やきもきと気をもんでいるのだった。彼女たちにしてみれば、このおれの規定しようのない曖昧さが、なんとしても気になって、どうにも堪らないらしかった。おれとどう話したらいいのかも分からず、おれがだれかも分からず、そこで、ただモゴモゴと埒もないことを言うのがせいぜいだったのだ。

「ねえ、ユーゼフや、」モゴモゴとモゴモゴの合間におばさんがたはこう言うのだ。「ものにはね、切りというものがありますよ。世間の口だってありますからね。もしお医者になりたくないというのなら、せめてものこと、女たらしか、馬気違いにでもなれないの？　ただね、こう、はっきりしてもらわなければ……はっきりと……」

そして、おれが聞いていると、おばの一人がもう一人の耳に口をつけて、社交人としても生活者としてもおれが未完成だとかなんとかささやいてから、おれのせいで頭を真空状態にさせられてしまったもので、気落ちしてげっそりしながら、またまたモゴモゴを始めるのだった。しかし、実際のところ、こんな状態が永久に続くわけのものでもなかった。自然という時計の針は、断固としていて無慈悲だった。最後の歯、親知らずがはえきったとき、おれは考えなければならなかった。いや、考えるまでもなく分かっていた――発育は終わったのだ。避けようにも避けられぬ殺戮のときが来たのだ。使命を終えたさなぎのむくろをふり捨てて飛びたってゆくちょうのよう、悲しみのあまりふるえおののく少年を男は殺さなければならぬのだ。霧から、混沌から、濁った溢れ水から、渦巻きから、ざわめきから、流れから、よしやあしから、蛙の鳴き声から、澄みきった結晶体の乱れを見せぬ形式のただなかへと、おれは移ってゆかねばならぬ――髪の乱れを整えたうえ、秩序正しく大人たちの社会の生活のなかへ入って行って、かれらと話をまじえねばならぬのだ。

いや、どうして！　おれはもう先刻、経験ずみだった、涙ぐましい努力をしたのだ――この試みの成果を考えると、まったく、おれは笑いがとまらなかった。髪を整えるため、できるだけの説明をつけるため、おれは本を書くことにしたわけなのだった。ふしぎに思われるかもしれないが、おれには、とうてい説明ぬきでは自分が社会に出られないような気がしたのだ、といっても、曖昧模糊としていないような説明など、まだ見当たりはしなかったのだが。初めからおれの願っていたことは、やがてじきじき世間の人びととわたりあう場合、ちゃんとした確かな足場がもうできているように、この本でもってかれらの好意を買いとろうということだった。そして――おれは計算した――もしもおれが自分について有利なイメージを人の心にうえつけられるとすれば、そのイメージはつぎにはおれをつちかって、

こうしておれはいやでも成熟した大人になってゆくだろう。それなのに、それだというのに、なぜおれのペンはおれを裏切ったのだろう？　なんでまた神聖な恥じらいがおれにまがいもない月並な三文小説を書くのを許さなかったのだろう？　胸のうちから、魂のなかから高尚な縦糸横糸をくりだすかわりに、どうしてああも下のほう、この足のつけねのところから糸をくりだし、本文のうちになにやら蛙とか、腿とか、未熟な甘ずっぱいような内容ばかりつめこんだりしたのだろうか？　ただ文体と響と抑制のきいた冷ややかな調子で、紙の上にそうしたものを絶縁し、そうして、おれがこの甘ずっぱさと別れたがっていることを表現したにとどまったのだ。アア、なぜだろう？　なぜまた自分の意図にさからうようにして、おれはその本に『成熟途上の記録』などという題までつけたのだろう？　友人たちはこんな題はつけぬよう、全体に、未熟をほのめかすようなものはどんな些細なものでも警戒するように忠告してくれたのだったが、むだだった。「そんな真似はよせ。」かれらは言ったものだった。「未熟というのはかんばしからぬ観念だ。自分で自分を未熟だと思っているようでは、だれがおまえを成熟した作家と認めてくれよう。つまり、おまえには分かっていないのだ。まず第一になくてはならぬ成熟の条件というのはだ――自分で自分を成熟したものと認めることだぞ。」しかし、おれには、自分のなかの洟たれをそうそうたやすくお手軽に解放してやるわけにはいかぬような気がしたのだ。それに、大人たちはだまされるにはあまりにも目はしがきいていて抜けめなく、そこで、また、こうした洟たれにたえずつけまわされている者としては、その洟たれをさしおいて人前に出てはならないというように思われたのだ。おれは真面目さというものに対しあまりにも真面目な態度をとりすぎたうえ、大人たちの大人らしさをあまりにもまた評価しすぎていたのかもしれない。

思い出、思い出！　頭は枕のなかにうずめ、足はふとんのしたにくるみこみ、おれはこうして、または笑いに、または恐れに体をふるわせころがしながら、大人たちのあいだに踏み入るということに損益の勘定をつけていた。結果においてあとあとまでも重々しく尾をひいてゆくこの〈踏み入る〉ことの個人的内面的な傷や痛手に関しては、どうしたことか、あまりに沈黙が守られすぎている。文学者、つまり、自分にもっとも縁のない、もっとも無関係なこと、たとえば、ブルンヒルダとの結婚に端を発する皇帝カール二世の魂の悲劇などということをテーマに、縦横の筆をふるう才、神のたまものに恵まれている人種は、自分自身の公衆的社会的人間への変化というもっとも重要な問題を扱うことは、それこそ、極度にいやがるのだ。まるで、かれらが作家であるのは、神の恩寵によるもので、人のせいではなく、天上から地上にその才能とともにあまくだって来たのだと、われひとともに思わせたがっているようだ。いったいどうやって、いかなる個人的な譲歩によって、いか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

なる個人的な敗北によって、ブルンヒルダのことか、言ってみれば、蜜蜂飼いの生活のことばかり書く権利を買いとったものやら、そのことになると、あからさまな光をあてるのを恥じているらしい。イヤ、イヤ、自分の生活についてはただのひとこともない。ひたすらもう蜜蜂飼いのことばかり。蜜蜂飼いの生活について二十冊も本を書きあげれば、たぶん銅像もできるだろう。――だが、どんなつながりがあるのだ？　蜜蜂飼いの王様とその私生活上の男とのつながりはどこにあるのだ？　男と青年とのつながりは、青年と少年とのつながりは、少年と幼児とのつながりは？　いつの日か、とにかく、昔は子供だったのだ――そのきみたちの涙ったれは、いま、きみたちの蜜蜂飼いの王様からどんな喜びを与えられているというのか？　このつながりを見ることのできぬ人生――全体の流れのうちにその発展を実現しようとしない人生は、ちょうど上から建てられていった家のようなもので、精神に分裂をきたした二重人格的なものに終わらぬわけにはいかぬだろう。

思い出！　人類にかけられた呪いは、われわれのこの世における実存が固定した一定の体系なぞ、いかなるものにせよ、がまんならぬと思っていること、しかも、固定どころか、万物は流転し、たえまなく動き、形をかえ、そして、一人一人がその人間をほかの一人一人によって喫ぎとられ、価値づけられているばかりか、そのうえ、頭のわるい目先のきかぬ鈍感な人間がわれわれにいだく観念も、英明俊敏な人間のいだく観念とくらべて、重要さにおいていささかも劣るところがないということなのだ。なぜならば、人は他人の魂における自分の反映に、もっとも深く従属しているものだからだ。たとえ、その魂がどんなに白痴的なものにしたところで、変わりはないのだ。おれは、おれのペンの同僚たち――世間の鈍な者たちの意見に対して、odi profanum vulgus（余は卑賤なる俗衆をにくむ）と宣言しながら、貴族的ないとも誇らかなポーズをとっている同僚たちの見解にまっこうから反対してはばからない。なんという安っぽい簡易化された現実回避の仕方だろう、なんという偽りの自尊への貧しげな逃避だろう！　まるっきり反対だ、おれは断言する、人の意見が冴えず馬鹿らしく窮屈であればあるほど、われわれにとってそれは意味が重く真実なのである。ちょうど足によく合った靴よりも、窮屈な靴の方がしつこく人を悩ますのと同じことだ。アア、人の判断――きみの理性、心情、性格、きみの体の組織、そうしたものいっさいがっさいに関するこの判断と意見。底なしの淵だ。その淵は、活字によって自分の考えをよそおい、紙の上にのせて人びとのあいだにばらまく大胆者の足もとに口をあけている。アア、紙、紙、活字、活字！　ここでは、われわれのおばさんたちの心のこもった親しみやすく家庭的な判断、意見について言っているのではない。イヤ、どちらかというと、おばさんはおばさんでも、まったく様子のちがった文化おばさん――自分の判断を雑誌新聞でのべたてるあのうざう

ざいる四分の一作家、おまけにつけられたような半批評家たちの意見におれはふれたいのだ。なぜならば、文学にひっつけられ、つぎはぎに当てられているごまんと控えたおなごの群れが世界の文化を席巻してしまったからだ。そして、その手合いどもは精神的価値の尊さをやたらと肝に銘じ、美学的に開眼し、たいていは、それらしい一家言なり一見識なりを持ちあわせていて、オスカー・ワイルドが時代遅れで、バーナード・ショーが逆説の大家だなどということをちゃんと心得ているわけだ。アア、かれらは自分たちが独立独歩、断固としていて、そのうえ、深みもなければならないのを知っているので、したがって、たいていは独立独歩で深みがあり、適度に断固としていて、しかも、おばさん的善意に満ちみちている。おばさん、おばさん、おばさん！　アア、文化おばさんの仕事場に一度も足を踏み入れず、そのつまらない瑣末なことにこだわる気質――生命から生命的なものいっさいを取りあげてしまう気質のメス先に、呻き声さえあげずただ唖のよう、解剖されるままになったことのない者、新聞で自分にかんするおばさん的見解を読むことのなかった者には、つまらない瑣末がどういうものか、そして、おばさんのうちにあるつまらぬ瑣末さがなにかということは、ついに知ることができぬだろう。

それに、まだまだ、とりあげだせば切りもない。地主と地主夫人の判断、女学生の判断、小官吏の視野のせまい判断、高級官吏の官僚的な判断、いなか弁護士の判断、中学生の誇大な判断、老人のふんぞりかえった傲岸な判断、待った、社会評論家の判断、社会活動家の判断、そして、医者の奥さんれんの判断、さては、両親の判断に従属している子供の判断、小間使いの判断、若い衆の判断、料理女の判断、女のいとこたちの判断、女子学生の判断――もうまったく判断の洪水だ。この無数の判断のおのおのがもう一人のべつの人間のうちできみという人間を規定し、その心のうちにきみというもののイメージを作りあげる。まるでもう千にもあまる人間のせま苦しい魂のうちに、きみが生まれでもしたようではないか！　しかし、おれのおかれた状況というのは、それにまた輪をかけたほどむずかしい、じつに厄介しごくなものだった。というのも、おれの本が、世のならわしに忠実な成熟した読み物にくらべると、はるかにむずかしく、やたらと人を刺戟するような厄介しごくなしろものだったからだ。それにしても、まったくのところ、この本のおかげで、そうそうは望めぬほどのすばらしい親友たちの一群がおれにできたのも確かなことだ。例の文化おばさんとか、それに類した俗衆の代表といった手合いにしてみれば、かれらの想像のまるきりおよばぬ閉ざされたサークルのうちで、ほかならぬこのおれが、おしもおされもせぬ名士や大家たちによってその栄光の輝きを惜しみなくふるまわれ、讃辞まであびせられて、そこの高みでこのうえもなく知的な会話をとりかわしたなどと、万が一にも耳にしたなら、もうきっとおれの足もとに平グモのよ

うにひれ伏して、靴のほこりでもなめるところだったにちがいない。しかし、この本には、また一面、なにかしら未熟なものがあったのだろう。まったくもってそのせいで、甘くみられ、なんとも恐るべきセミ・インテリ層の中途半端な灰色のうぞうむぞうに、なれなれしくつけこまれることとなったのだ。成熟途上だということが、文化をひさぐ贓物買いや淫売の集りのようなこの知的社会のふきだまりに、こうして誘いをかけるような結果になったわけだった。鈍な頭脳にはこの本があまりにも繊細微妙なものでありすぎる一方、また同時に、外面的な尊厳のしるしだけに敏感な俗衆のまえでは、とりつくろい威厳を誇示するところがあまり少なすぎたのかもしれない。いずれにせよ、一度ならず起こったことだが、おれが高くそびえる聖域に足を入れて戻って来て、それこそ尊敬の目で見てもらってもおかしくないというようなときに、たまたま通りでばったり出会ったどこかの技師夫人だの女学生だのが、まるで仲間、同類、身内のものでも見るようにお手軽におれを扱って、肩など叩きながら、こう叫ぶというしまつだった。「コンチワー、ユージェック（ユーゼフの愛称）、あんた、あんたって馬鹿ね——あんたって青くさいのね！」こういうわけで、おれはある者にとっては賢明な人間、べつの者には愚鈍な人間なのだった。ある者から見ると、ひとかどの人物、べつの者から見ると、目にもとまらぬような存在、一人の者にとっては平民的、もう一人の者にとっては貴族的に見えたというわけだ。優等と劣等のあいだに分裂し、それとこれとのどちらにも等分になれしたしみ、真面目に重々しくどっしり構えてもいれば、軽くあしらわれもし、すばらしくもあれば、みじめでもあり、また、才能もあれば、無能でもあり、なにもかもなりゆき次第、まったく、状況ひとつというていたらく！　おれの生活は、そのときから、静かな家の片隅で過ごしていた昔より、なおのことはなはだしく分裂することとなったのだ。自分がだれのものか、自分の値打を認めてくれる人たちのものか、それとも、いっさい認めようとせぬ人びとのものか、まるでおれには分からないのだった。

だが、なによりもいけなかったのは——だれ一人まだこうも憎しみをもやした者はないのではないかと思われたほど、セミ・インテリの俗衆をおれが憎みながら、不倶戴天のかたきのように憎みながら、ひそかにその俗衆におれが通じて、自分で自分を裏切っていたことなのだ。おれは、エリートや貴族のあいだに支持をえていたというのに、そのあたたかく広げられた手のうちから、こともあろうに、青二才とおれを見くだしていた下司どものうす汚い腕のなかへと逃げていったのだった。まさにこの一事こそ、将来の発展を決定し、人がそのうちで自己を確立し形成してゆくもっとも重大なよすがとなる。——つまり、たとえば動きまわったり、話したり、もぐもぐ言ったり、ものを書いたりしながらも、その間、ただひたすらに完成し完結した

大人たちと、その結晶した明晰な観念の世界だけに思いをよせ心をくばるか、それとも、俗衆、青二才、学校の生徒、女学生、いなか紳士、文化おばさん、文明評論家、論説記者などのヴィジョン、怪しげに濁ったえせ文化社会のヴィジョンに絶えまなくつけまわされ、知らぬまにそこでそのとりことなって、這いからまるつたか、アフリカのなんやかやといった植物にもまごう緑にしだいに体をおおわれ包まれてゆくことになるかという問題なのだ。そこで、おれはというと、一瞬のあいだも、今も言ったように、人間なみでない人間どもの人間らしからぬ社会のことを忘れることができなかった——その泥沼のあおみどろを想像するだけで、もう身ぶるいが出、やたらと吐き気をもよおし、恐慌をきたさんばかりにひたすらおののきながらも、ちょうどへびに見こまれた鳥のよう、やはり、そこから離れることができなかったのだ。こうも未熟へ未熟へと心の動くのは、それこそ、どこかの悪魔がこのおれをけしかけ、そそのかしているとしか思えないほど！　まったくの話、天性にさからうようにして低級な階層とおれがしたしみ、しかも、愛情まで感じていたというのは、その低いところにおれを青二才として押しとどめておいてくれるからではなかろうかと、疑われてくるくらいだった。おれはほんの一秒のあいだにせよ、まともな口がきけなくなった。そのくらいのことなら、やってやれぬこともなかったろうに、どこかのあるいなか医者がおれのことを鈍物と思いこみ、馬鹿なことしかしないものと決めこんでいるのをよく知っていたため、こういう仕儀とはあいなったのだ。また、女学生のだれかれがおれという人間からはいかがわしい振舞ばかり期待しているのを心得ていたので、仲間のあいだでも、おれは真面目な顔して上品に振舞うことなど、まるでできなくなったものだ。まったくもって、精神世界では絶えまない力ずくの凌辱が行なわれている。われわれは一人で生きているのではない。われわれは他人の機能でしかありはしない。どんなにふんばっても、われわれは他人が見ているようなそういうものとして、存在するほかないわけだ。おれの個人としての災厄は、なにやら不健康な陶酔を感じながら、喜んで青二才、小僧っ子、未成年者、さては、文化おばさんのともがらに従属依存したことなのだった。アア、いつもいつもおばさんというこの頸木をしょっていなければならないとは！　まったくもう、どこやらの単純な人間がきみのことを単純だと思っているから、きみは単純だということになるので、馬鹿がばか呼ばわりするからこそ、きみは馬鹿にならざるをえなくなる——未成熟な手合いがその青くささにきみをひきずりこみ、青くさい汁にどっぷりつけるから、それで、きみまで青くさくなるというわけだ——アア、もしもこのなんとか息をつかせてくれる〈アア〉という言葉がなかったとしたら、本当に気も違いかねぬところだろう！　成熟した高級な世界にふれながら、しかも、そのなかへ、はいることができぬとは……高貴、

優雅、理性、威厳といった特性から、大人たちの判断から、そして、互いに認めあい、ピラミッドのいただきに立ち、価値をもつことから一歩はなれて、ただガラスごしにむこうの飴をしゃぶるだけなのだから、堪らない！　大事な問題には通せんぼうをされ、そのまましんがりに加えられた余計者でいるわけだ。大人たちと交わりながら、いつもいつも十六歳の青二才でいるばかり、ただ大人のふりをしているだけという感じしかないのは、どういうことだろう？　作家、文学者のふりをして、文学的なスタイル、練りあげられ熟した言い回しを真似るだけだとは？　芸術家として自分の〈わたくし〉を公開の場で守りぬく酷薄な勝負にのぞむというのに、自分の敵に秘密裡に手をかしながら、進みでてゆかなければならなかったとは？

アア、そうなのだ――社会生活に足を踏み入れたそのそもそもの初めに、おれはもう程度の低いえせ文化社会の聖なる祝福を受け、下級社会の手によって、洗礼式の油をしこたまぬりたくられていたのだった。しかも、問題をなおさらややこしいものにしてしまったのは、おれの社交的態度というものがまた遺憾な点の多い、まったくもって曖昧な、箸にも棒にもかからぬくらいひどいもので、このえせ文化社会のえせ社交人たちを相手にするには、まるで無力きわまるものだったことなのだ。あまのじゃくから来たものか、それとも、ひょっと臆病さかげんから来たものか、いずれにせよ、ある種の不器用さが邪魔をして、おれは成熟というものには、なんとしても身丈が合わなかった。おれの心にこびるように心を寄せてくる者など出て来たりすると、まったくの話、ただもう恐慌のあまり、おれはその人物をつねったりするしまつで、そんなことも珍しくはなかった。実際、おれはどんなにねたんだことだろう――ゆりかごのうちからもう卓越し、九天の高みの位置を約束されているかともみえるあの文人たちを。かれらの精神は、まるで千枚どおしで尻を下からつつかれてでもいたように、上へ上へと絶えまなく上昇をつづけたのだ。このように真摯そのものとでもいうべき精神に満ちみちた真摯きわまりない作家たちは、偉大な創作の苦悩にひたされながら、もって生まれた天性で、いともやすやすと目くらむばかりの雲の高みに身を遊ばせることができた――神さえもなにか卑しく、威厳を欠いたものに見えるほど高い、永遠に神聖化されたこの観念の世界を自由にあまがけることができたのだ。おれはかれらがねたましかった。なぜまたすべての者に許されるわけにはいかぬのか――恋愛小説をもう一つ書くことが、社会のおぞましい傷口をふみつけて膿を出してやることが、しいたげられた人びとのために戦う闘士となることが？　または詩を書いて詩人となり、〈明るく輝かしい詩の未来〉を信じることが？　才能ある人士となり、おのれの精神によって広汎な大衆の才能のない精神を養い、高めることが？　アア、苦しみ悩み身をささげ、いけにえの火にわれとわが身を焼くとはいえ、いつもあの九天の高みに――

こうまで卓越し、こうまで成熟した範疇のうちに身をおくということは、なんという恍惚だろう。まるで貯金局に預金でもするように、幾世紀にもわたる古い文化体系をなかに立て安全確実に自己を生かしきること――これこそ自分にとっての満足でもあり、他人にとっての満足でもあるにちがいない。しかし、おれはあいにく青二才で、青くささがおれの唯一の文化体系だった。おれは二重にとらわれて、制約されているのだ――いまだに忘れられずにいる自分の子供のときの過去によって一度、それから、人がおれについていだくイメージの子供、つまり、かれらの心にうつったおれの漫画によっていま一度。おれは緑のうれわしげなとりこ、深く茂った藪のなかの一匹の虫にほかならなかった。

やりきれないばかりか、まったく、そら恐ろしいような状況。というのも、この未成熟、青くささほど、大人たちの嫌悪と憎悪の念を呼び起こすものはないからだ。どんなはげしい徹底した破壊にしろ、成熟という枠のなかで行なわれさえすれば、そんなものなどかれらはいともやすやすと耐えしのぶ。ある成熟したイデーをべつの成熟したイデーによって征服しようとする革命家――たとえば、共和制のために君主国をうちたおすとか、また反対に、君主国のために共和制をたたきつぶすとかいうようなそんな革命家など、大人たちには恐ろしくもなんともないのだ。もちろん、成熟した高邁なもうけ仕事が繁盛をきわめるのは喜んで眺めるというわけだが、しかし、もしだれかのうちに未成熟さを、青二才の洟ったれをかぎつけようものなら、たちまちその相手にとびかかって、あひるをなぶる白鳥のように、くちばしでさんざんに突つきまわすことだろう――あてこすりや、皮肉や、嘲笑でたたきのめしてしまうことだろう。そして、大人たちのとうに否認してしまった世界からまいこんで来たこの風来坊がかれらの巣をけがすのをけっして許しはしないのだ。じゃ、いったいどこでどうやってけりが付くというのだろう？　この道をたどった果ては、いったいどこへ出るのだろう？　なにがもとになって（おれは思った）青くさい緑におぼれ、未完成のとりことなるようなこんな傾向がおれには生まれたのだろう？　それも、つまりは、このおれが未完成で未熟で過渡的なものになら、わけても、ふんだんに恵まれている国――どのカラーもだれの首にも合おうとせず、悲運薄幸というよりも、不細工と無能が野山に満ちて、嘆きの声をあげているような国に生まれたせいなのだろうか？　それとも、ひょっと、過渡期の時代――五分ごとに新しいスローガンを、新しい顔つきをこしらえて、ひきつけでも起こしたように、ありとあらゆるやりくちで自分の顔をしかめてみせる時代に、たまたまおれが生きているためだろうか？……青ざめたあかつきの光が半開きのよろい戸ごしに流れこんでいたが、おれはというと、自分の人生の帳じりをこうして合わせているうちに、にわかに顔に赤みがさしてきて、敷布のなかの淫猥なクスクス笑いに腹をヒコヒコさせたはて、思わず

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.